2024（令和 6）年度　東京大学　入試問題　第 1 問　解答例

一　掛け売りには、損失以外に、得意客の確保や維持、新規購入の可能性、仲卸商人からの優遇、緊急時の預金効果という、利もあるから。

＊解答の骨格は、「掛け売りについて」「悩み事でもある反面」「利点（市場原理での利益、得）もあるから」である。
＊具体的な項目を列挙しただけでは、「商売戦略上の合理性と合致」する理由の説明になっていないので注意。解答は 50～60 文字で。簡潔にまとめる表現力が問われている。

二　行商人にとって、掛け売りは商品支払いと別に贈与交換を含み、贈与した時間・機会を返す期限は借り手の主観で決まるから。

＊「そんなこと、俺にわかるわけがないだろう」とあるのは「返す期限を決めるのは借り手の主観である」からである。この点からも、解答に「贈与交換」の内容が必須であることは明白である。

三　借り手が商品支払いを遂行しなくても、贈与への返礼をすれば、商売に限らない人間関係全体での均衡は成立するということ。

＊前問二と三とは、どちらの設問にも当然「贈与交換」が鍵概念として関連してはいるが、本問と前問とは傍線部の内容がまったく異なるのだから、解答内容は重複するはずがないので、傍線部の位置などに固執した型にはまった解き方をしないこと。

四　行商人と客とは、掛け売りの値段交渉の過程で、商売とは異なる次元の助け合いである贈与交換も含むという了解を共同で生じている。ツケが成功裏に認められると、この暗黙の了解は市場取引の不均衡を恩恵のやり取りで修正させる共同的な基盤となるということ。(一二〇字)

＊主語「余韻」＝「表されていない・何かが残る」の意が必須。「本文全体の趣旨を踏まえて」解答する。傍線部近辺のセリフのような例示の抜き書きに終始しないように。

五（各２点）
ａ　曖昧　　ｂ　憤（り）　　ｃ　拘泥

Copyright 2024 - 現代文 まなびの礎 All Rights Reserved.　作成者　中野芳樹